

301 三弦手列伝

□ 山岸澤三五郎

宮古路豊後掾の三弦手、享保十五年共に江戸に下る。

302

□ 中園四郎三郎

豊後掾の三弦手、以後、初代宮古路文字大夫の伝をも勤め之文
軍向芝居出勤可

303

初代 佐々木市蔵

梅都、見馬、初代幸一

常磐津年表の記より、初代梅都、見馬と云い江戸の三弦手より、
し、更に宮古路豊後掾に依りて、佐々木幸一と改む。元文三年正月、
薩摩外記に初代文中大夫のシテを勤めりと、勤場出勤の始りとし、
以後、同人の三弦手とて芝居毎に出勤し、享保四年十月、佐々木市蔵と
改名。明和五年二月死歿す。享年不詳。
○ 幸一の豊後掾の三弦を勤めしことは記録に付なきも、元文初年、新
大坂町三河屋敷の「名残」の様ざし。正本には、宮古路豊後掾同
綱大夫、佐々木幸一の記名あり。察するに、當時の譜は、岸澤三三
郎、中園四郎三郎に次ぐ三弦手とて、豊後掾に属し、後初代文字
大夫、豊後掾に依りて及ぶ。そのシテ三味線として芝居に出勤するもの如し。
○ 老の樂には佐々木市蔵、馬利屋三右衛門の弟子なりとあり。
△ 外曲「蜘蛛の糸」江戸左所都馬近の留神津同様の、伝承、幸一馬紋の「宮古路宮古土、
質差、鳴計、鐘入場、妹背塚松栢、考、紅音、柵、三味線、抱時、駒島志園礼。

304

佐々木市之助

市蔵の弟子、宝暦四年三月市村屋に嫁め、市蔵の上調子を勤め、
以来、はしく出勤し、同七年五月森田屋に嫁め、仲大夫のシテを勤

めいし(常) 明治四年十一月 森田達は文字の都の夕午を勤めし以来
芝居も勤め

三代目佐々木幸八

姉の佐々木市十郎

初代市蔵の長子、宝曆五年春中村屋に市蔵の上調子と勤めりし
市之廻等と交互にしく、市蔵 明治二年正月 中村屋に三代目幸八と
改名(常)と若大夫の夕午を勤む、後若大夫富土岡の一派を起す也
其に至りて森田達に出勤せり、安永三年十一月 市村屋興行限
芝居も勤め

佐々木古流

傳は一市村の三味線弾きとして初めに記録に現われし者、即ち宝曆五
年市村屋「子宝堂」後常我と三番目「浦衝」若葉文化に都考大夫
千中の夕午を三味線に出勤しといふ(此の上より若大夫と掛合)後千中が
京都へ歸るにいつと常我津流流儀へ来らる、佐々木市蔵の弟子、
宝曆十年「中村屋」に市蔵の上調子に出勤後数回の市蔵あり、
明治五年市村屋に市蔵殺すも、翌六年二月市村屋に始りて初代文字
大夫の夕午を三味線とせり(常)然るに同年中志事、遣酒、肴
大夫等の家元と隙を以てて曲名取一派を樹立すもや、入りと
その夕午を三味線とせり、富土岡に於けりて三代目幸八と同じく安永
三年十一月市村屋も勤後、森田達にその名あり

307 佐々木 市四郎

初代市藏の弟子明和三年正月初日も市村庵に市藏の上調子を勤めた
（常）市村は出たが娘が有り、其の後古流と共に豊名賀派に加わり
安永四年九月市村庵興行あり、初代造酒大夫は志事大夫に代りも
大夫場となり、伝まは古流に代りも市村三味線を勤め、爾後二代目造酒
大夫のヲテとも勤めし。天明三年中造酒大夫常盤陣に後歸り也
富本に入りて齋宮の三味線を弾けり、寛政四年夏度常盤陣
に歸り、岸津市四郎となりし。同六年又富本に入りし。如し。

308 佐々木 東藏 又 三味藏

初代市藏の弟子。始の三味藏と書き、明和三年十一月中村庵三味
線への上調子を勤めたりと伝あり。幸人に從ひて教書去勤あり。其に
富名園派に入り、安永三年八月市村庵興行に行き、東藏と改め
幸人に代りたり。三味線を勤めたり。

309 鳥飼 彦里石

伝統不明、長唄、鳥羽屋三石街の弟子か。天明元年正月森田庵に
富士園若大夫のヲテと弾けり。

310 佐々木 長春

天明二年二月市村庵に曲名賀造酒大夫（三代目）のヲテを勤む

□ 初代 岸澤式佐 (重保十二代 天明三)

享保十二年生 初名式助といひ、式佐と改め、河内の花菱者たり。
佐々木吉流、志事太夫に從ひ、明和五年の市村座頭見吾番附に
式佐改め式部とて、吉流と共にタテ三味線格に記載(ワキモノ)
明和六年、向人の常盤若津家元と分離す。居殊々、爾後初代
又吉太夫のタテ三味線を強くとす。これより常盤若津の三流は
岸澤となる。その端緒を南けり。

天明三年九月二十四日歿 (享年五十二)

◎文化年以字本常盤若津年表によし、明和七年吉式部となり、
四十二歳なりといふ。和樂年表に從之は享保十二年生といふ
享年五十四とす。

◎齋藤月環の岸澤系譜に於てこれを岸沢の三代目となす。即ち
元祿の頃式部節を創めたる広瀬式部太夫後に岸澤式部
太夫を初代とし、同人の男流節を三代目となす。

◎吉古踏敷太夫の三流をつとむ。右和佐吉式部の内弟
△作曲に善知鳥、乃面。

□ 鳥羽屋里夕

宝曆八年十一月市村座に初代市藏の上調子を彈き、一頁年代記
に見ゆる外、この當時にはその名無し。これ天明改、里長の上調子を彈
き、里夕と同一人なり。又分明ならず、殊に鳥羽屋の姓を名乗りと
依り、市藏の上調子を彈けり。その後目す人なきことなり。即ち此は
予の假想なり。里夕は鳥羽屋三右衛門の弟子。又市藏も彼の
三右衛門に師す。其の頃常盤若津の三流は佐々木
一内と定まりし中、鳥羽屋の姓を名乗るに上調子を勤めしに
あらず。か、天明三年二月森田座に富七園若太夫のタテを勤め、
鳥羽屋里石は同人なり。